

# 仕立て法の違いが切花および切枝の品質に及ぼす影響

花き生産コース 曾根原 凱地

(指導教員：雨宮 剛)

## 1. 緒言

切花及び切枝は外観品質が商品価値を左右する園芸作物であり、生産現場では安定的な生産が求められている。一方で、環境変動だけでなく資材価格の高騰や労働力不足など、限られた条件下で収量および品質を確保するための栽培技術の確立が重要な課題となっている。本研究では主要な切花品目であるトルコギキョウやローゼルを対象とし、仕立て法の違いが生育や品質に与える影響を明らかにするとともに、トルコギキョウについてはカルシウム液肥が生育や生理障害発生に与える影響についても併せて検討した。

## 2. 材料および方法

### (1) トルコギキョウ

品種は‘カルメンルージュ’と‘ロジーナイエロー’を使用し、以下の4つの試験区を設定した。主茎頂花を摘み取り、その下の側枝を伸ばし花を咲かせる慣行仕立て(試験区1)、主茎頂花を摘み取った後、側枝を3本だけ残して、咲かせる花を三輪に調整する仕立て(試験区2)、側枝をすべて摘み取り主茎頂花を咲かせる仕立て(試験区3)、試験区1と同様の仕立てを行いカルシウム液肥「コノカル」を葉面散布する仕立て(試験区4)とした。

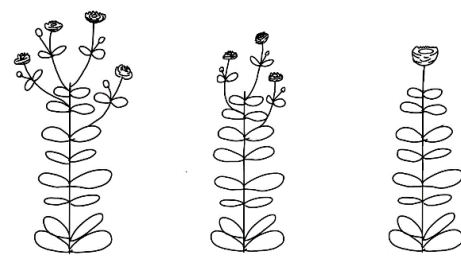


図1 トルコギキョウの仕立て法  
左：試験区1・4 中：試験区2 右：試験区3

2025年2月20日に播種、5月20日に3号ポリポットに鉢上げ後、7月15日に主茎頂花および側枝除去を行い、以降収穫調査の始まる8月12日まで節数および草丈の調査を行った。コノカルは7月17日以降100倍希釈液を週に1回の間隔で葉面に散布した。収穫調査については8月12日から8月26日の期間に株ごとの開花状態が同等になった時点で切花長、切花重、茎径、花重、花径、花卉数について調査した。

### (2) ローゼル

ローゼルは美濃加茂地区で切枝栽培に使われているレッド品種を使用し、以下の試験区を設定した。手を加えない慣行の仕立て(試験区1)、定植後地際から70cmの高さで主枝をピンチする仕立て(試験区2)、側枝を5本のみ残し、主枝と5本の側枝に栄養分を集約する仕立て(試験区3)とした。

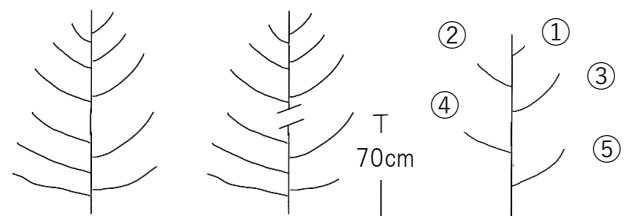


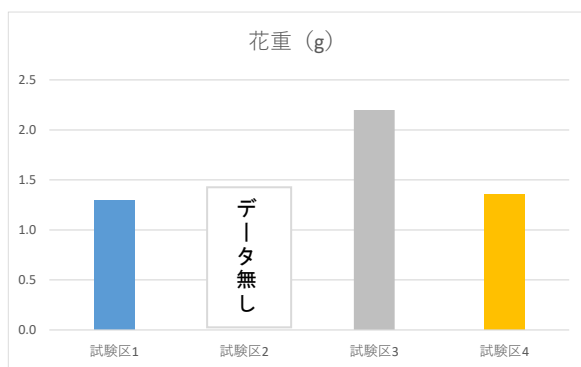
図2 ローゼルの仕立て法  
左：試験区1 中：試験区2 右：試験区3

2025年6月26日にみのかもローゼル振興会より分譲されたポット苗から挿し木を行い、7月17日に3号ポリポットに鉢上げを行った。8月8日に露地への定植後、9月18日に前述の仕立てを行い、以降2週間間隔で側枝長の調査を行った。収穫調査は11月17日に切枝長、茎径、果実数、分枝数、主枝長、主枝径、総果実数、総分枝数について調査した。

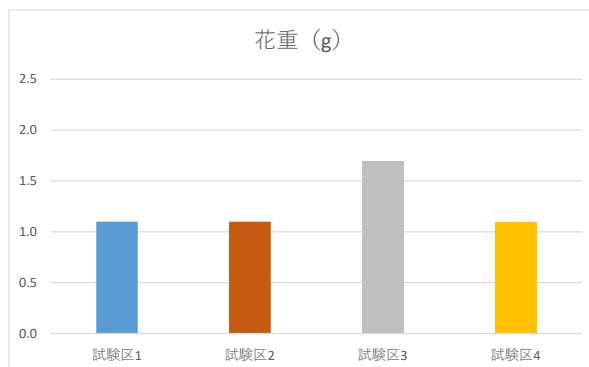
### 3. 結果および考察

#### (1) トルコギキョウ

節数および草丈については二つの品種とも試験区で大きな差は見られなかったが、試験区1および4で他よりも節数および草丈の数値がやや高い傾向が見られた。これは側枝を多く残したことで光合成がより活発に行われたためだと考えられた。また、切り花品質については二つの品種とも1輪仕立てにした試験区3で花重の値が高くなったが（図—1、図—2）、その他の調査項目についてはコノカルの影響も含めて異なる結果もみられたことから、品種によって仕立てや薬剤の影響が異なる可能性が考えられた。



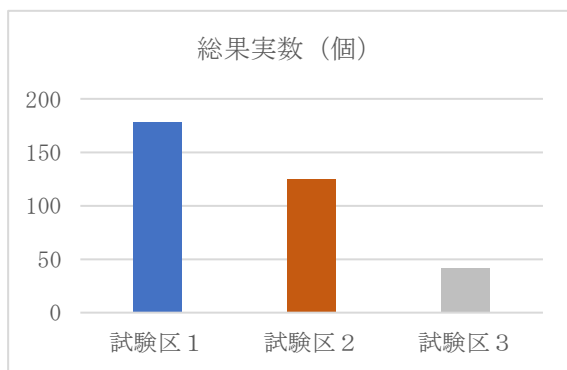
図—1 ‘ロジーナイエロー’ 花重



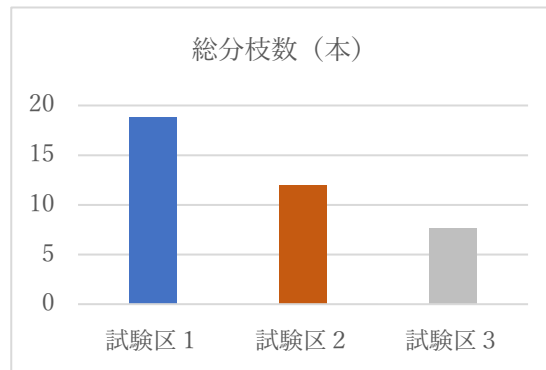
図—2 ‘カルメンルージュ’ 花重

#### (2) ローゼル

ローゼルの収穫調査では、試験区1が一株当たりの平均総果実数 178.4 個（図—3）、一株当たりの枝数の平均値である総分枝数 18.8 本（図—4）と最も多くなった。これは最大の葉面積を確保できたことで光合成による養分供給が活発だったからだと考えられた。対して、側枝を5本に制限した試験区3は一株当たりの収穫量は少ないものの、枝ごとの実の充実度や茎の太さが向上した。



図—3 ローゼル総果実数



図—4 ローゼル 総分枝数

### 4. まとめ

本研究により、トルコギキョウでは品種によって仕立て法の影響が異なることが明らかとなった。したがって、今後のトルコギキョウ栽培においては、品種特性に応じた柔軟な仕立て方で栽培を行っていく必要がある。また、カルシウム液肥「コノカル」の影響については花径拡大に寄与する可能性があり、品種特性を考慮した検討が必要であると考えられた。ローゼルにおいては、仕立て法の違いが切枝の形態や結実性に明確な影響を及ぼした。今後は、出荷し得る長さを満たした側枝の割合（可販率）や、作業性を含めた総合的な評価を行うことでより実用的な栽培技術の確立につながると考えられる。